

## 協議会会長より

### 会長メッセージ

国立大学法人 機器・分析センター協議会会長  
栗原靖之（横浜国立大学）

皆様のおかげをもちまして、令和7年度機器・分析センター協議会総会・シンポジウムを無事、盛会のうちに開催することができました。心より御礼申し上げます。

本年度の総会では、新たに1機関の入会および2機関のオブザーバー参加が承認され、協議会の構成メンバーがさらに充実しました。また、次期会長として山内一夫氏（沖縄科学技術大学院大学）を選出することができ、協議会が次のステージへ進むための力強い一歩を踏み出せたものと感じております。

シンポジウムでは、文部科学省および大学機関からそれぞれ2名ずつご講演を賜り、大変示唆に富むお話を伺うことができました。特に、岡山大学的那須学長にはご多忙の中ご参加いただき、研究基盤整備に対する強い情熱と明確なビジョンをお示しいただきました。その熱意は、参加された皆様にとって大きな刺激となり、今後の取り組みに向けた力となったものと確信しております。

また、文部科学省のご担当者の皆様には、懇親会や二次会にもご参加いただきました。現場の声を直接聞きたいというご意向のもと実現したものであり、率直な意見交換を通じて、現場と行政との距離が縮まり、相互理解が一層深まったように感じております。文部科学省と現場は、対立する立場ではなく、同じ目標に向かって歩むパートナーであることを、改めて共有で

きたのであれば、今回の開催意義は十分に果たされたと言えるでしょう。

本会の開催にあたりましては、長崎大学の皆様に多大なるご尽力を賜りました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

さて、国立大学はすでに大きな変革期の中にあります。このような時代において、協議会は何をなすべきか、何を発信すべきかについては、次期会長のもとでさらに議論が深められていくことでしょう。少子化や財政制約といった避けがたい環境変化の中で、国立大学がどのように対応していくのか、難しい舵取りが求められています。しかし、20年後の国立大学が、高等教育機関として我が国の科学技術力の向上に確かな貢献を果たしている姿を実現しなければなりません。その将来像を今描き、実現に向けて歩み始めなければ、時代の大きな流れに押し流されてしまいます。その際に問われるのは、現場の力です。協議会は、現場で支える人々の足腰を強くし、変化の波に負けずに立ち向かうための体力と気力を高める存在であり続けたいと考えています。

引き続きご支援くださるようお願いいたします。

## 開催を終えて（長崎総会・シンポジウム）

### 回顧録

長崎大学 真木俊英

2025年10月10日（金）、想定を超える多数のご参加を頂き、無事に本年の「機器・分析センター協議会 総会・シンポジウム」を終えることができました。現地ならびにオンラインでご参加いただいた皆様に御礼申し上げます。また、総会・シンポジウム開催の機会を頂いたことで、改めて協議会活動に対する皆様の多様な思いに触れる機会を得ました。ここに開催を振り返り、記録することで、これからの方々のご参考になれば、これ以上うれしいことはありません。



私が総会・シンポジウム開催をお引き受けするにあたり、一番に考えたことは、文科省の方々に皆様と会話して頂く十分な時間を確保したいということでした。例えば質疑応答も何往復もしていただくだけの時間的余裕を作りたい。政策を決定する方々と現場で活動する方々のリアルな言葉でのコミュニケーションを確保したい——そう考えました。

次のこだわりは、「交通の便利なところで開催したい」という思いです。長崎大学は、かつて全国的に流行った大学の郊外移転に失敗したお陰（？）で、現在でも比較的便利な場所にあります。大学の講堂などを確保すれば、経済的にも安価に実施できる見通しがありました。しかし、西九州新幹線に先立ち4年前に駅前に完成した出島メッセを是非とも使用したい。新たな中心部として成長する長崎駅前に集って頂くことで、長崎を味わって頂く機会をより多くとって頂けると考えました。そして、何より

移動時間が読みやすく、参加し易いだろうという期待でした。



ただ、最新の会場は利用料金が高額になりがちです。例年の開催費から大きく踏み越すことにならないかが心配でした。そう思いながら、会場の下見に行き概算見積もりを得たところ、やはり相応の金額ではありました。ところが一方、最新の設備とネットワーク回線を備えたこの会場は、インターネット中継のコストが、古い会場に機材を持ち込むコストと比較して約3分の1で済み、結局トータルコストはあまり増加しないことが判明しました。

もう一つ、大きく出島メッセに引き付けられたのは、会場設営等を容易に外注できるという点です。確かに多少のコスト増となりますが、これらのサービスを利用することで長崎大学のスタッフの労務を最小限にすることが可能だと考えました。大学で開催するイベントでは、スタッフ労務負担の上に開催費が抑制されている場合が珍しくありません。しかし、これは切り詰めて収縮してゆくデフレ思想です。「利用しなければサービスは発展しない」という経済好循環の考え方に立脚し、必要なコストは甘受して、「外注できるものは積極的に外注して可能な限り労務負担を軽くする。運営に注力する」という方針を採りました。

出島メッセの会場案内の方から、「来年の10月17日（金）は既に埋まっており、10月10日（金）なら空いている」と告げられました。長崎では、10月7、8、9日は「長崎くんち」という有名なお祭りの期間です。つまり、「前日入りしていただければ『長崎くんち』の最終日を体験し、長崎

特有の文化を感じて頂ける」——この段階で私の中ではほぼ、2025年度のシンポジウム日程が確定しました。

今回から総会・シンポジウムとなり、「技術職員会議」がシンポジウム内に包含されることになりました。技術職員会議の名称が消えることについて、幹事からは一部の方々からの理解が得られるかの懸念も示されましたが、既に技術職員はシンポジウムそのものの開催に深く関わっているという現実があり、「吸収」や「消滅」というネガティブなイメージではなく、発展的「融合」と言えましょう。実際、本学からは津田さんと地福さんの2名の技術専門職員が実行委員会として参加し、彼らのリードで総会・シンポジウムの準備が着々と進んでゆきました。

さて、今年度の総会・シンポジウムはもう一つ重要な要素として、栗原会長体制の最終年度であるということです。栗原体制の集大成を行うとともに次年度の会長を円滑に選出する必要がありました。そして、会長からのご提案により、ポスター発表を行うことになりました。午前中の会場を追加確保したために経費増が生じましたが、これは極めて大きな効果を生じたと考えています。



まず、ポスター発表の主体となることで、出張し易くなった職員が多くなったのではないのでしょうか。発表者になることで主体的参加が可能となります。さらに、文科省の方々にも二泊三日で参加していただき、各ボードを精力的に回り、現場の皆様とのお話し合いをもつ時間を作れたことは、双方にとって大変有意義であったと考えています。そして、総会・シンポジウムプ



ログラムの外形的な評価（のべ200泊以上）、および本学津田の尽力により長崎コンベンション協会から10万円の助成を得ることができ、経費増分の一部を補填できました。

シンポジウムの構成は、栗原会長の意を汲んだものとなりました。多くの大学の立場を取り入れたシンポジウムの構成に腐心された様子が伝わる内容となりました。また、文科の異なる局から2名の方に二泊三日で参加いただけたことは、栗原会長の綿密なコミュニケーション戦略に追うところが多いでしょう。

栗原会長はじめ幹事の皆様のご尽力により、シンポジウムは大変充実したものとなりましたが、運営の視点から少し反省を挙げておきたいと思います。



1. それでも過密感があった。時間的にも空間的にも、まる1日みっちりの実施でした。
2. ポスター会場の午前中での完全撤収などが必要でせわしなかった。
3. 休憩スペースが不足した。電源コンセントが使えなかった。

これらの中で、1の一部と2、3は、お金で解決できる問題かもしれません。ポスター会場を午後借りて、部分的に休憩スペースにする。コンセントはケチケチせず、すべての箇所を利用購入して誰でも利用できる様にする——そのようなゆとりを生み出す経費は無駄ではなく有効だったのではないかと思います（人により見解が異なるかもしれません）。

一方、私にとって総会・シンポジウム開催をお引き受けした最大の成果は、当部門の職員が能





動的・創造的に参加してくれたことです。津田、地福、岩田、下田、岡本のメンバーが集まり、事前打ち合わせを行い、準備と当日の役割分担を自分達で決め、準備の方法や手順、そして制作物などについてアイデアを出し合い決定しました。技術系の職員は、日常的に自分の担当で手一杯となり、これまで共同で何かをするという機会が乏しかったという事実を再認識させられました。チームとしての活動は時に軋轢を生みますが、何かを大きく前に進める力があります。本件を通じて「技術マネジメント」の未来に大きな可能性を感じました。

残る課題は、懇親会をどうするかについてです。長崎には多くの観光資源があり、様々な構想がありました。例えば、



会場に直結するヒルトンホテルでの開催、あるいは会場前からシャトルバスに乗り、稲佐山からの100万ドルの夜景を見ながらの懇親会——これらの構想は金銭的に届かずあえなく断念しました。例年、一人6000円で実施していた懇親会をそのまま踏襲すると、かなり内容が制限されてしまうことが見えてきました。インフレが進行しているという不可避の事情もあり、本年度は7000円とさせて頂くことにしました。

料金アップにもかかわらず、懇親会も想定90名から大幅アップの112名の参加を得て、本学地福の司会で進行しました。乾杯のご発声をお願いしていた那須岡山大学長が、ぎりぎりまでお見えにならず、道に迷われたのかと心配しました。後でお伺いしたところ、那須学長は、岡山市で「新スタジアムの整備を推進する会」の代表を務めており、長崎市に昨年オープンしたサッカー専用スタジアムを視察に行かれたとのことでした。

懇親会会場の横断幕は、会場のご好意により無料で作成していただきました。会場は200名収容可能とのことでしたが、狭すぎず閑散とし過ぎず程よい人口密度であったと思います。会が進行する中、多田宏子先生の顕彰が発表されました。これは、ご定年に伴い会長特別補佐の任を終えられた、多田先生の当協議会に対する長年に渡るご貢献に対する幹事からの謝意として実施されました。多田先生：ご参加いただき、ありがとうございます。



そして最終章、時流はモノからコトへ。物質的なツーリズムから体験型へ。私達の業界では測定装置から測定サービスへ、那須学長の言葉では買うから借りるへ。一般的に体験は、より深い満足感とともに、強く記憶に刻まれます。前日入りして、「長崎くんち」の龍踊や傘鉦と遭遇したかもしれない皆様に、二日目の夜は長崎孔子廟の変面ショーをご体験頂くことにしました。「これは部内秘で進めましょう」と気軽に告げたところ、当部門の職員は手伝いに来た事務職員にまで秘密のままで進めました。結果、地福さんによる発表まで完全なサプライズイベントとなりました。



開催地である長崎特有の和華蘭文化の一端をご参加の皆様の記憶に刻んでいただけたとしたら、団結力を持って細部にまで腐心した本学メンバーにとっても大きな喜びです。

最後は、山内次期会長のご挨拶で締めくくりました。新しい時代の予感が広がります。技術系人材の活躍の場は益々広がり、より一層、主体的・能動的な活動が求められることが予想されます。当協議会

の発展と、それが我が国のより良い未来へとつながりますよう祈念しつつ筆をおかせて頂きます。

## 2026 年度総会・シンポジウムについて(第 1 報)

令和 8 年度の総会・シンポジウムの開催日時・場所は以下を予定しています。

記

日時：令和 8 年 10 月 9 日（金）

場所：大阪大学中之島センター

<https://www.onc.osaka-u.ac.jp/>

〒530-0005 大阪府大阪市北区中之島 4 丁目 3-53



## 第 5 回小集会 2 月下旬開催予定

令和 7 年 9 月 9 日（火）に開催しました第 4 回小集会「研究基盤を支える人材のミッションと評価」に続きまして、第 5 回小集会を 2 月下旬頃に予定しております。長崎でのシンポジウムにおける内容もふまえ、皆様との議論や情報交換が深まる機会にできれば幸いです。

## 定点アンケートについて(再依頼)

### アンケート回答のお願い

令和 7 年度機器・分析センター協議会アンケート（定点アンケート）につきまして、まだご回答をいただけていない機関がございます。回答期限を 1 月中旬まで延長いたしますので、未回答の機関はご対応くださいますようお願いいたします。

<https://forms.gle/F4dnPWqDvcGbAcHv5>

## 会員校の活動報告

第 2 回目は初回に続き、鳥取大学を含む 6 大学が共同で行う「～能登の子どもたちへ贈る科学実験教室～」プロジェクトについて掲載いたします。取り上げてほしい取組事例等ありましたら、協議会広報委員会までお知らせください。

## 全国大学技術組織による 理科支援プロジェクト in 能登 第 2 報

○横野 瑞希，河尻 直幸，安藤 敬子，岩田 千加良，大村 敏康，馬場 恵美子，松浦 香織，松浦 祥悟，山本 博昭，（鳥取大学 技術部）

### 1. はじめに

鳥取大学を中心に金沢大学，名古屋工業大学，東北大学，神戸大学，大分大学の 6 大学が共同で実施している「全国大学技術組織による理科支援プロジェクト in 能登」（以下理科支援プロジェクト）について報告する。本事業は，令和 6 年に地震・豪雨と 2 度の災害が発生した能登地域の子どもたちに理科教育を介して科学に触れる機会と心から楽しめる時間を届けることを目的としている。前稿ではクラウドファンディング<sup>[1]</sup>の経験を中心に報告した。本稿では第 2 報として実際の能登地域での活動を中心に執筆する。

2. 開催概要

理科支援プロジェクトの概要を表1に示す。

表1 理科支援プロジェクト開催概要

期間	2025 年 10 月 15 日～16 日
訪問校	七尾市立石崎小学校，能登町立宇出津小学校，小木小学校，柳田中学校，能都中学校
実験テーマ (計 11 テーマ)	(小学校テーマ) －196℃の世界， 金メダルを作ろう， ペットボトル空気砲， バネ電話， 偏光を使った工作実験， クロマトグラフィ工作実験， 燃料電池のデモ実験， 真空の実験 (中学校テーマ) ミニライト作り， ロボット実験， 燃料電池の工作実験

鳥取大学技術部が平成18年度から実施している「出前おもしろ実験室」プロジェクトから派生して、この度新たな理科支援プロジェクトとして6大学共同で実施した。開催校の調整は当初、能登町教育委員会と連携して行っていたが、都合が合わない学校が多数あった。そこで、輪島市内や七尾市内にも調整範囲を広げ、最終的に能登町内 4 校および七尾市内 1 校で実施した。

3. 実施の様子

スタッフ計 19 名（鳥取大学 6 名（うち学生 1 名），金沢大学 3 名，名古屋工業大学 3 名，東北大学 2 名，神戸大学 3 名，大分大学 2 名）で実施し，参加した子どもの数は延べ 186 名であった。会場の様子（図 1），

当日スケジュール例（表 2）について以下に示す。また，子どもたちが実験室後も興味を持った実験について学ぶことができるよう実験概要や事業概要についての資料（図 2）を配布した。



図 1. 会場の様子

表 2 当日スケジュール（例）

時間	行程			
13:00	学校到着・会場設営			
13:30	実験室開始			
13:30-13:40	はじめの挨拶			
	1 組 A 班	1 組 B 班	2 組 C 班	2 組 D 班
13:40-13:55	ミニ ライト	低温実験	燃料電池	ロボット 制御
13:55-14:10	ロボット 制御	ミニ ライト	低温実験	燃料電池
14:10-14:20	休憩			
14:20-14:35	燃料電池	ロボット 制御	ミニ ライト	低温実験
14:35-14:50	低温実験	燃料電池	ロボット 制御	ミニ ライト
14:50-15:00	おわりの挨拶・アンケート			



15:00	実験室終了・撤収
15:30	学校出発

出前  
**おもしろ実験室**  
 in 能登

2025.10.11 15:14

全国の大学で働く技術職員が集まって  
 科学の楽しさを伝える特別な科学実験教室を行っています。

科学支援プロジェクト  
 理科支援プロジェクト

**Q1. どこから来たの？**  
 高松大学、愛媛大学、富山県立大学、  
 愛媛大学、岡山大学、大分大学などの  
 大学から来ました。

**Q2. 大学ってどんなところ？**  
 好きなことを、自由に学ぶことができます。新しいことを学ぶための設備があります。  
 理科や実験だけでなく、国際や体育、芸術などの研究もあります。  
 大学では様々なイベントがあります。ぜひ参加して大学を体験してみてください！

**Q3. 技術職員ってどんな人？**  
 大学の研究室や研究センターで活躍しています。最新の設備や装置を扱うので、  
 物を詳しく見て触れることができます。最新の設備や装置を扱うので、物を詳しく見て触れることができます。

このプロジェクトはクラウドファンディングによる  
 高松大学、愛媛大学、富山県立大学、愛媛大学、岡山大学、大分大学などの  
 科学支援プロジェクト、理科支援プロジェクト、高松大学などの協力により  
 実施しています。

大学から持ち寄った**実験の紹介**

**マイナス196℃の世界** 高松大学  
 超低温の世界は、その温度は-196℃です。この温度ではどのような現象が起きますか？  
 この実験では、大学で利用されている超低温装置を使って、いろいろな現象を観察しています。  
 「低温の世界」で何が起きるのかを一緒に探ってみましょう。

**LEDを点灯させる** 高松大学、大分大学  
 LEDは、半導体材料で作られた発光素子です。電気を流すと光を発します。  
 実験では、LEDチップと回路を組み立て、光を発するLEDを作ります。  
 実験が完了したら、LEDチップの構造や発光の仕組みについて説明します。

**自分の手や体の動きでロボットを動かそう** 高松大学  
 人の動きや体の動きを使ってロボットを動かすという、ロボットを使った実験です。  
 この実験では、ロボットの動きを制御するためのプログラムを作成し、ロボットの動きを制御します。  
 ロボットの動きを制御するためのプログラムを作成し、ロボットの動きを制御します。

**氷でひらけるカラフルアート** 高松大学  
 カラフルなアートは、氷で作ることができます。氷が溶けると、カラフルなアートが完成します。  
 実験では、カラフルなインクや染料を使って、氷の上にアートを描きます。  
 実験が完了したら、氷が溶けるとアートが完成する仕組みについて説明します。

図 2. 配布資料

#### 4. アンケート及び考察

実験終了後に子どもたち、教員に実施したアンケートの結果を図 3,4 に示す。「楽しかった」が 95.7%と圧倒的で、科学を「好き」または「もっと好きになった」と答えた子どもは 97.3%にのぼり、興味関心の向上が確認できる。子どもたちからは「もっと理科を勉強して詳しくなりたいと思いました。」「今まで実験をあまりすることがなかったのでもいい経験をしたのでこれからもこのことを忘れずにいたいです。」「学校のやつは嫌いだけど今日の実験は楽しかった。もっとやりたかった。」といった声があり、体験価値の高さが伺

える。一方で今まで習った理科を「むずかしい」と感じる回答が 40.3%にのぼり、授業内容と連携して更に学びを深める余地があると考えられる。教員側の評価は「とても良かった」が多数で、寄せられた声からは「大学の方々による出前講座ということで内容の難しさはどのくらいなのか、本校の生徒はどれくらいついていけるか分らなかったが、15 分ほどの短い内容で 4 種類もあり、生徒が楽しみながら学びを深めることができました。中学校ではなかなか触れることができない内容で、科学への興味が高まり、他にもいろいろ見てみたい、やってみたいという声がありました。」「楽しみながら科学を体験できる機会がどの子にも与えられるって大事だなと感じました。家庭によっても差があるので初めての体験の子が多かったと思います。震災に関係なくこんな機会があればいいなと思います。」「実験結果を思ったよりも正しく予想していた。予想していても実際にみると驚いていた。」と体験としての重要性や学習効果の高さ、理科支援事業としての需要の高さが伺えた。また負担面についても「全く負担ではなかった」、「あまり負担ではなかった」、「どちらでもない」あわせて 92.4%と学校側に対する負担をかけることなく、良好な運営であったと考

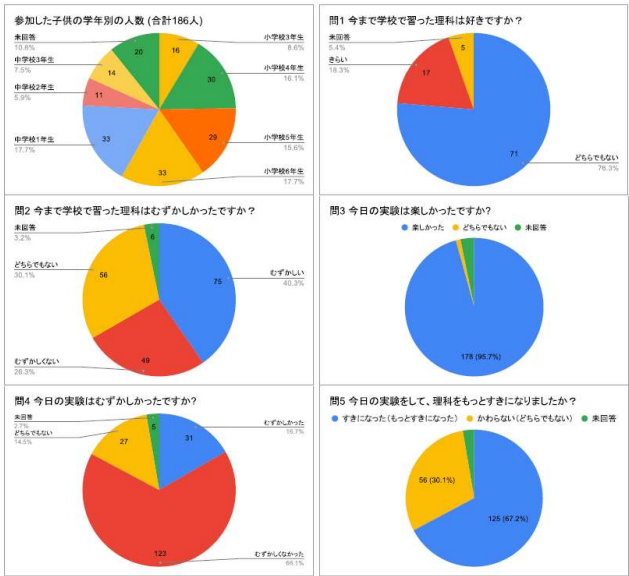


図 3. 子ども用アンケート結果

えられた。

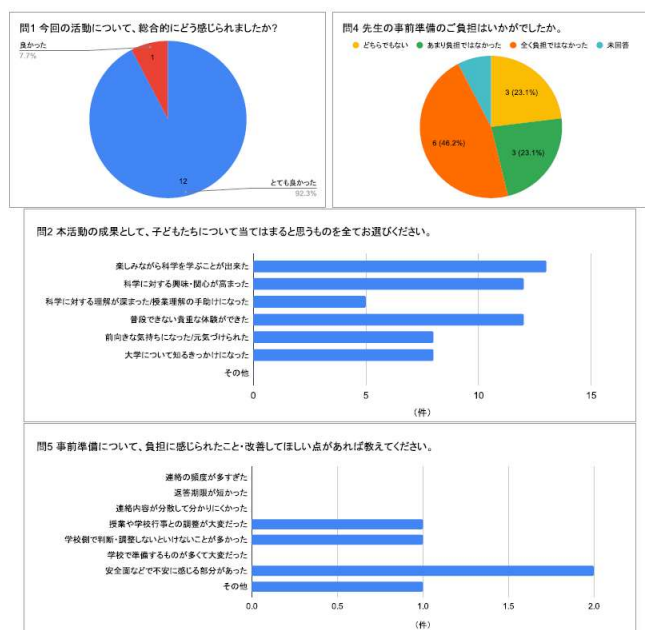


図 4. 教員用アンケート結果

## 5. おわりに

理科支援プロジェクトにおける実施状況を紹介した。通常、地域貢献事業は学内のスタッフのみで行うことが多いが、今回のプロジェクトでは協働する大学と連携して実験室を開催できた。またそれらを技術職員のみで企画・運営・実施したことは大変貴重な機会であった。今回の活動を通じて、それぞれの機関での取り組み、用意した教材の内容や伝え方の工夫などの情報交換を行うことができた。

本プロジェクトの完了にあたって、クラウドファンディング支援者向けに最終報告を行う予定であり、その他各機関内、技術職員による研究会においても事業報告を行い、本事業を周知していきたいと考える（2025 年 11 月末現在）。

本プロジェクトはクラウドファンディングを利用し、全国から寄せられた思いを能登地域の子どもたちに届けるため、本学をはじめ協働する 6 大学が一丸となって準備を進め、実施することができた。この活動から波及して、技術職員による地域貢献活動が今後ま

すまず発展していくことを期待する。

## 謝辞

国立大学法人機器・分析センター協議会をはじめ、クラウドファンディングの広報にご協力いただきましたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。また、本プロジェクトの趣旨にご賛同いただき、共催としてご協力いただきました金沢大学、名古屋工業大学、東北大学、神戸大学、大分大学の皆様にも、重ねて深く感謝申し上げます。

## 参考文献

READYFOR, “6 大学合同プロジェクト | 科学体験学習で能登の未来に笑顔とエールを！,”

<https://readyfor.jp/projects/151852>

## シンポジウム裏側から

### あとがき

長崎大学 地福寿史

2025 年 10 月 10 日に開催されました「令和 7 年度機器分析センター協議会 総会・シンポジウム（以下、シンポジウム）」にて、運営スタッフを務めさせていただきました。

開催の打診をいただいた 2 年前、「我々だけで本当に運営できるのだろうか」と不安を抱いたことを、今でも鮮明に覚えております。しかし蓋を開けてみれば、Discord や Web ページでの広報効果、そして「長崎くんち」翌日という日程も功を奏し、予想を上回る約 150 名の皆様に現地へご来場いただきました。10 月中旬とは思えぬ暑さの中、長崎までお越しいただき心より感謝申し上げます。また、オンラインでも多数の方にご参加いただき、大きなトラブルもなく盛会のうちに終了できましたことを安堵しております。運営に際し至



らない点もあったかと存じますが、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

今回の運営において、個人的に注力した点が2つございます。1つ目は配信体制の内製化です。費用削減のため、回線・機材・撮影のみを外部委託し、配信・録画・編集は私自身が行いました。これにより費用を半額以下に抑えることができましたが、現地テストが前日夕方のみという綱渡りの状況でもあり、内心は一抹の不安を抱えつつの本番でした。

2つ目は、生成AI「Gemini」を活用した受付プログラムの自作です。外注費用の削減と、受付時間の短縮を目的とし、Googleの無料キャンペーン（大学ドメイン向けAI利用枠）を活用して開発に挑みました。シンポジウムの半年ほど前から、業務の合間を縫っての試行錯誤でしたが、個人的に満足のいくシステムができあがり、プログラミングへの自信にも繋がりました。一方で、AIが生成するコードを疑いなく使用してしまう自分に違和感を覚える瞬間もあり、「便利なツールであっても、最終的には人間の知識と判断が不可欠である」と痛感する良い機会ともなりました。

私事で恐縮ですが、家族が「長崎くんち」に参加していたこともあり、直前は公私ともに極めて多忙な日々でした。全国規模のシンポジウム運営という貴重な経験をさせていただいた一方で、特に開催1か月前からは通常業務に支障をきたすほどの負担があったのも事実です。この有意義な会を持続可能なものにするためにも、今後は開催校の負担を減らす仕組みづくりが必要だと感じております。

最後に、本シンポジウムに携わってくださった全ての皆様に御礼申し上げますとともに、次回開催校である大阪大学様の成功を心より祈念いたします。

#### Discordのチャンネル増加中

Discordのチャンネルが増加中です。気になるチャンネルをチェック！

- ・長崎（総会・シンポジウム・技術職員会議）
- ・分析相談なんでも
- ・NMR相談チャンネル
- ・フローサイトメーター
- ・DNAシーケンシング
- ・元素分析
- ・質量分析ms
- ・【終了】（新潟）総会・シンポジウム-フリースペース
- ・幹事会への意見・質問・ゆるい雑談
- ・会長のつぶやき
- ・医学・生物系広場
- ・共用機器の管理運営
- ・企業との連携について
- ・セミナー情報等
- ・リユース情報
- ・公募情報
- ・協議会小集会



#### -----Discordへの登録方法-----

下記のリンクは国立大学法人機器・分析センター協議会のDiscordの招待リンクとなっております。

<https://discord.com/invite/2w9CU4Asw7>（本招待リンクは招待期限なしとなっております。）

#### X (Twitter) もあります。

X (Twitter)で最新情報を配信しています。

<https://twitter.com/kikikyogikai>



お願い

#### ご意見募集

このニュースレターや協議会活動についてお気づきの点がありましたら、Discordまたは下記のメールアドレスにてご連絡ください。

連絡先：[kiki\\_kanjikai@googlegroups.com](mailto:kiki_kanjikai@googlegroups.com)

国立大学法人 機器・分析センター協議会  
ニュースレター No.15

発行日：2025 年 9 月 30 日

編 集：国立大学法人 機器・分析センター協議会  
広報委員会

発 行：国立大学法人 機器・分析センター協議会

連絡先：[kikikyogikai@gmail.com](mailto:kikikyogikai@gmail.com)

Website: <https://jcrea.jp/>

メーリングリスト：[kiki\\_ml@googlegroups.com](mailto:kiki_ml@googlegroups.com)